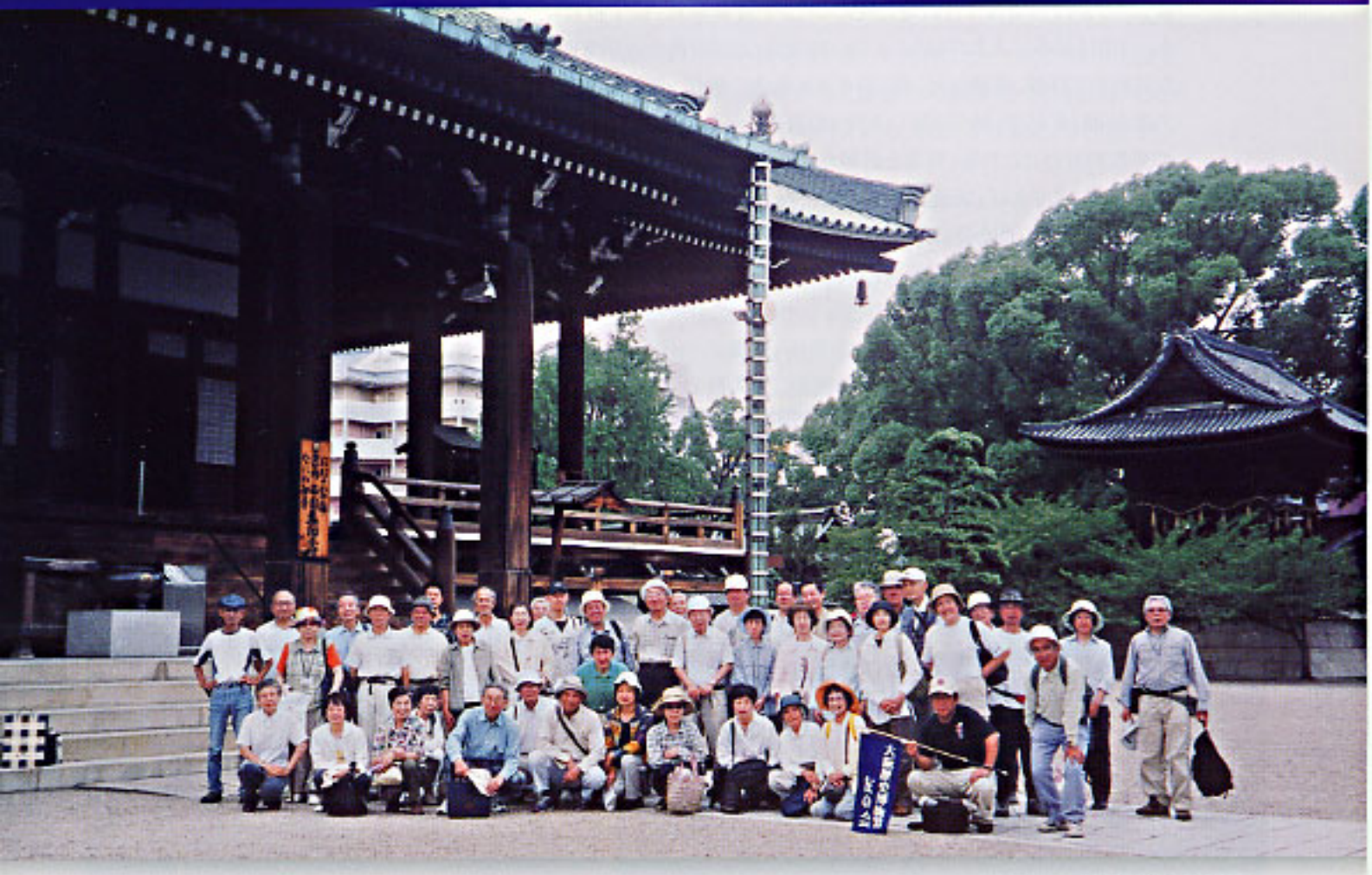
OSAKA MUSEUM OF HISTORY

大阪歴友

Vol.2
2005. OCTOBER

大阪歴史博物館　友の会だより　No.4



大念仏寺にて記念撮影

友の会見学会報告　中世都市「平野」で遊ぼう!学ぼう

仲田　昌宏

7月24日、猛暑の中、博物館の豆谷先生と会員50名という予想以上の参加者を得ました。

まず、杭全神社では、本殿まで入れていただき宮司さんから主神、素戔嗚尊（スサノオノミコト）と神道の話を聞き、境内摂社のいくつかも面白く勉強させていただきました。

次に豆谷先生から境内の一角に残っている環濠跡で「平野郷」の成り立ちを、平野小学校前では、「懐徳堂」の設立のきっかけとなった私学「含翠堂」の解説。泥堂口地蔵の前では、環濠内での生活規制として一定時間外での出入り制限等の話をしてもらいました。

次は「大念仏寺」です。当寺では融通念仏宗とはどんな宗派か、開祖された聖応大師良忍はどんな人か、又、上人が確立された日本音楽の祖といわれる「声明（しょうみょう）」の楽しい話を聞きました。

このように午前中は非常に密度の濃い勉強をしました。午後は、解散して個人それぞれに「平野郷」めぐりです。幹事4人と会員さんは「全興寺」へ表敬訪問と「新聞屋さん博物館」、「平野映像資料館」を訪れました。参加された会員の皆さんはいかがでしたか。是非率直な感想文を事務局までお送りください。今後予定しております「寺内町めぐり」等の参考にさせていただきます。（友の会会員）

大阪町めぐり　平野

石丸　健子

17年度初頭、年次計画の初め、特集展示と現地見学を同時進行でという案が出された。

7月24日現地見学実施、JR平野駅9時30分集合、10時出発、総勢50人が参加。今年は異常な暑さの中、誰云うとなく2列縦隊で目的地に向かった。平野郷惣社、杭全神社に到着。早速、宮司さんの案内で三殿の前へ。日頃は滅多に入れてはもらえない神域近くにまで進み説明を聞く。社殿は檜皮葺、苔むす神域を見て荘厳な気持ちで拝観、拝聴した。後、三々五々境内の散策。連歌所の内部も小窓を開けて覗き、室内長押に「三十六歌仙額」を見学、延宝7年（1679）の裏書きがあるとの事。今に伝える趣深いものがあった。あと1ヶ所福岡の須佐神社だけとの事、貴重な経験をした。神社に別れを告げて参詣道を南進、環濠遺跡の見学。

大鳥居をくぐれば、国道25号線。やや西よりに平野小学校門前に古河藩ゆかりの陣屋跡の石碑があり、学芸員豆谷氏の説明を受ける。実際は解らぬとの事、首をかしげる。陸橋を渡り旧道に入る。泥堂地蔵堂があり拝顔、昔から変わらぬ道筋を、総本山大念仏寺へ。大阪府一の木造建築、本堂24,000m²（約7,300坪）の境内に大小30の堂舎が甍を並べる。ビッショリかいた汗を冷やしながら、本堂にて寺僧のご案内。大念仏寺の地は坂上田村麿の第二子広野公の菩提所、修楽寺の別院であったところと伝えられている他色々。幽霊の片袖縁起等。本堂を出てから皆で記念撮影。大人数で大変。

解散後、長宝寺、全興寺等に立ち寄り、商店街で昼食。第4日曜なので「まつや」さん（映像博物館）に皆で行く事になり立ち寄る、約1時間余、豊富な話題を持っている方なので話の尽きる事なく聞き入った。あとの方が来られたので交替。住んで40年からになるが、「住めば都」、初め分からなかったこの土地もだんだん楽しくなってきた。（友の会会員）

静と動の町・岸和田を訪ねて

戸田　健治

まず、南海線岸和田駅ではなく、蛸地蔵駅で降りる。古びた商店街を通り、蛸地蔵の名で有名な天性寺に着く。大きな地蔵尊があるが寺守りも見あたらない。蛸に依って戦いに勝ったのでその名があるが、蛸と戦いではピッタリこない不思議な事だ。次いで木町の町並みへ入る。紀州街道沿いの中二階や出格子など、昔時を偲ぶ通りで、車も少なく静かなたたずまいだ。少し表通りに出ると、近代的で立派な「岸和田だんじり会館」がある。有名な喧嘩祭りで、その時季に来れない人が充分その情景を迫力をもって感じられるように動の世界を表現されている。

そこを出て岸和田城を見る。丁度城内では近代文豪の短冊展が開かれていた。明治～昭和時代の著名な小説家、詩・歌人の短冊108点が展示され、これ一枚でも家宝になるなと話しあった。又その3階には城の歴史が表現され13代に渡る岡部氏の様子等詳しく見せられた。最高層より市域内外の景観は素晴らしいの一語に尽きる。

岸和田城にて

後、市役所横の自泉会館（大阪の綿業会館も手がけた渡辺　節の設計）は昭和の紡績の華やかな時代を象徴している。現在市の文化施設として利用されている。

古い街並みや城の静けさと、その街中を秋祭りには、だんじりが走り廻る全国的に有名な「動の世界」を演出させる岸和田を後にした。（友の会会員）

お化け暦の歴史に思う

高木　允通

隠れたベストセラーの「暦」が今年も書店にあり、年末の挨拶とともに届きます。日常の「暦」研究プロジェクトに興味を持ち、シンポジウム「暦の歴史と民俗」(H17.2.27)に出席しました。古来、暦づくりには時の政権の権威に係わるテーマと天文学、理学全般あるいは哲学・宗教におよぶテーマなど、関係する研究範囲は広く、深いものがあります。

暦づくりには、各時代の先端技術が駆使され、大阪の知見・技術も参加したとのこと。一方では、主に農業・漁業に安直に役立つ各時節用の民間暦が存在しています。陰暦から太陽暦への転換期・明治以降の民間暦は、すぐに双方を取り込み、今日に至っています。いま偶然にも100円ショップでは、方位磁石と尺と暦が、いずれも安価で手に入ります。暦には各人の星占いサービスもついています。

インターネット技術により、民間暦はさらに増殖しているのでは、との意見がシンポジウムでありました。各業界使用の潮時・節季などを含めた暦データは、GPSの位置情報も加わり、使い勝手を高め活用されています。天上と地上の理をコンパクトにまとめた安価な「暦」を民間用ツールのお化け暦とするならば、エンタメ性をも併せ持つ、この手軽な小冊子が、庶民文化の中でどのような色の花をこれからも咲かせ続けるのでしょうか。時代の知恵を取り込み進化しながら、さらに広く根を張って生き続けるのでしょうか。(友の会会員)

連載「浪花百景」

仲田　昌宏

「浪花百景」は、江戸時代末期、大阪の名所旧跡、庶民の風俗や代表的な年中行事、花鳥風月を題材として一養斎芳滝(1841～1899)、南粋亭芳雪(1835～1879)、一珠斎国員(生没年不祥)の3人の絵師が分担して、100枚の中判組みものとしています.私達も、もう一度、この一枚一枚の地に訪れ、大阪の経済発展とともに失ってしまったものを再発見できたらと思い、始めることとしました。

1.錦城の馬場(国員画・中央区)

元和元年(1615)5月、大阪城は夏の陣により焼失し、豊臣氏は滅亡した。二代将軍徳川秀忠は、大阪を天領にし、徳川の力を天下に示すため、豊臣の大阪城の上に徳川の大阪城を修復させることにして、近畿・北陸から西の大名65藩を動員したが、それでも10年の月日が必要だった。又、寛永6年(1629)にやっと天守が完成した。

城の西とその南は、馬場と呼ばれる芝生が広がり、厚紙張りの囲いの茶店が並ぶ店があったり、茶店のうち、大きな日傘のついたものは「傘の下」と呼ばれる庶民の行楽地であった。(友の会会員)

特別展 日英交流 大坂歌舞伎展
《上方役者絵と都市文化》のご紹介

澤井 浩一

江戸時代後期の大坂歌舞伎は、18世紀後半から19世紀前半にひとつの黄金期を迎えます。それは19世紀初めの大坂の歌舞伎を席巻した二代目嵐吉三郎（1769～1821）と三代目中村歌右衛門（1778～1838）のライバル関係に象徴されます。ハンサムで女性ファンを多く獲得した吉三郎、様々な役柄をこなし男性に人気があった歌右衛門という全く異なるキャラクターの二人が共演することはなく、それぞれのファンは互いに贔屓（ひいき）の役者を支持すべく、盛んに役者絵や摺物などを出版して激しく対抗しました。こうした役者や贔屓たちの活動により、大坂の歌舞伎は大きな盛り上がりをみせました。折しも231年ぶりに上方歌舞伎の名優坂田藤十郎の名跡が復活する記念すべき年に、大英博物館をはじめとする欧米と日本の優れた上方役者絵等のコレクションを通じて、都市大坂が生み出した豊かな歌舞伎文化を紹介します。

（博物館学芸員）

難波宮（前期・後期）の建築について

“博物館で展示している復元模型に対する意見”について

植木 久

博物館10階の展示室には、後期難波宮の大極殿が原寸大で復元されている。また前期、後期の宮殿中枢部の復元模型も展示されている。これらの模型を作製するにあたっては、建築史の専門家を交えた研究会をおこないながら、内容の検討をおこなってきた。ただ復元にあたっては、複数の案が考えられ1つに絞り込むことができなかったことや、資料不足で推定に留めざるを得なかった個所も少なくない。館のオープン後、寄せられた疑問や意見に答えるべく、小論を述べる。

【前期難波宮について】

7世紀半ばという時代を考えると、“大陸式”の建築様式の要素が濃すぎる。もっと神社建築に近いわが国古来の建築様式だったのではないか、という意見がある。これに対しては以下のように答える。

前期難波宮の建築遺構や全体の設計には、大陸の宮殿造営思想や設計手法が極めて色濃く見受けられることから、復元模型に示す建築様式が妥当である。具体的には、宮殿中心部を飾る目的で、内裏南門の両側に八角形の楼閣建築が配置されているが、これは中国の漢代以降の建築に見られる手法である。また発掘調査により検出された建築遺構の特徴を丹念に分析すると、極めて合理的な設計手法がとられていて、個々の建物を重要度に応じて格差をつけているが、これも中国の文献に同様のことを見出すことができる。

このような要素が多々認められることから、建築様式に対しても、大陸様式が採用されたと考えることに問題はない。

【後期難波宮について】

後期難波宮大極殿の復元については、以下のような疑問点が出されている。

①後期難波宮の大極殿を単層としていることについて（わが国では中心的な建物は重層とするが中国では単層が多い（ただし裳階はつく））

②大極殿の屋根を寄棟形式としていることについて（わが国では中心的な建物の屋根形式は入母屋とするが、中国では棟とする）

③身舎柱と庇柱の高さが同じ高さにしてあることについて（わが国の建築はほとんどが身舎柱の方を高くするが、中国では大規模な建物は両者を同高にする）、といったことである。

これらの意見に対しては、古代の難波が大陸の影響を受けやすい土地柄であったことから中国の宮殿造営思想が大きく影響したと考えたこと、また別の考え方として後期難波宮と同時代のものとして唐招提寺の金堂が参考になったこと等の理由で、現在の形に復元したものである。

ただ、①と②に関しては、今後も検討する必要がある。③に関しては、現在復元工事中の平城宮の大極殿において構造診断をおこなったところ、身舎柱と庇柱を同高としなければ構造的に耐えられないことがわかり、後期難波宮の手法でよいことがわかった。

建物を復元するにあたっては、資料が限られているため、明らかにできることばかりではない。その際、推定を交えなければならないが、どこまでが確かで、どこからが推定かといったことは注意する必要があろう。

（博物館学芸員）

※8月27日に行った「古代史講座」の要旨です。

編集後記

「大阪歴友」第2号をお送りします。前号で予告したように、今回から「浪花百景」をテーマとした連載をスタートしました。初回は提案者でもある幹事の仲田昌宏さんに寄稿いただきましたが、会員の方からの投稿を歓迎いたします。「浪花百景」にどのような名所が描かれているかは「大阪市立博物館館蔵資料集18・浪花百景」をご覧いただくのが便利です。博物館のミュージアムショップ「文楽」で600円で販売しています。また、博物館2階「なにわ歴史塾」で閲覧することもできます。自分のお気に入りの場所について、原稿をお待ちしています。

（事務局・まめ）

●大阪歴友 Vol.2（大阪歴史博物館 友の会だより No.4）
平成17年10月1日発行
●編集・発行 大阪歴史博物館友の会
〒540-0008 大阪市中央区大手前4-1-32